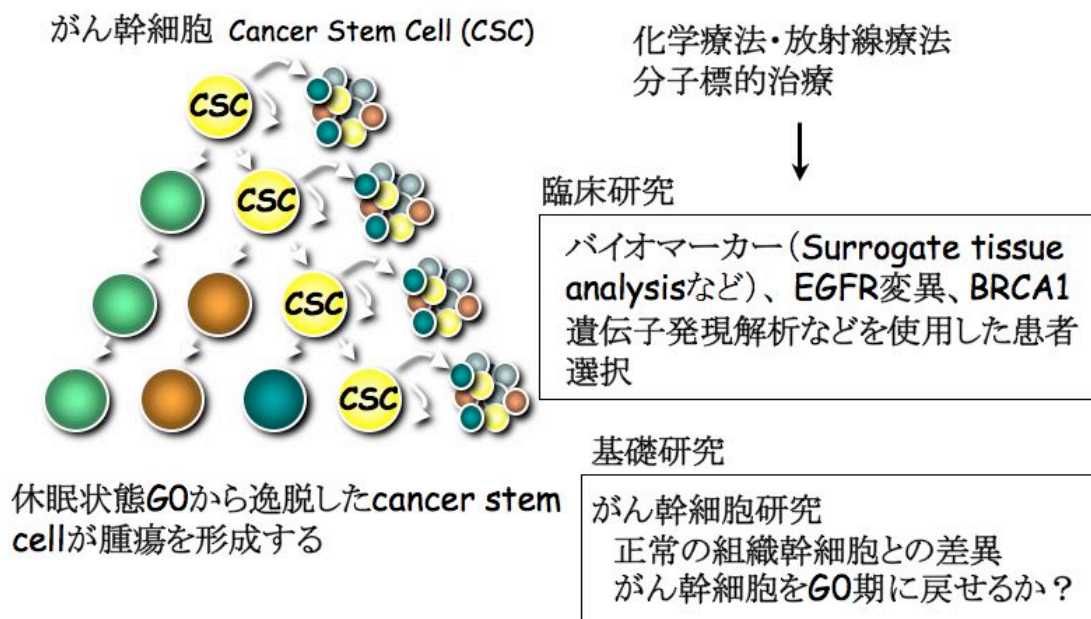


呼吸器内科 肺がん 臨床と研究の展望



増加する肺がん

肺がんの診断と治療に関するこの10年の進歩を、10年前に予見できたであろうか？ 診断に関しては、1990年代初めから日本で開始されたCT検診により、確かに初期の肺がんの発見が可能になった。CTを診断機器として使用すれば、より早期に発見できる症例があるというのは確かであり、予測可能であったともいえる。しかし問題点は残されている。画像的に肺がんを疑うことは可能であるが、次のステップとして組織学的ないしは細胞学的に、がんであることを証明しないといけない。CTガイド下生検は一つの手法である。今後はさらに蛍光内視鏡などの局所診断法の進歩が期待される。

肺がんは、5年生存率が15%と予後の悪いがんの一つである。年間6万人以上の死亡者があり、日本のがん死の第一位である。肺がんは喫煙者・男性・高齢者に多いという認識が一般的であるが、最近では非喫煙女性に増加傾向がみられている。肺がん治療における最大の話は、2002年のEGFRに特異的なチロシンキナーゼ阻害薬 (EGFR-TK1) の臨床現場への導入と、2004年のEGFR遺伝子変異の発見である。EGFR-TK1はEGFR遺伝子変異がある症例では奏効率が高く、アジア人女性・非喫煙者・腺癌という臨床的背景を有している患者により有用性が高いことが判明している。EGFR遺伝子変異がある群では無増悪生存期間が長い、やはり薬剤耐性は生じてくる。EGFR-TK1獲得耐性に関しては、EGFRの二次的変異と推定されているが、詳細な機序に関しては今後の課題である。

21世紀の肺がん治療は、バイオマーカー、遺伝子発現解析などを使用した化学療法の選択という個別化医療の時代に進んでくると予想される。基礎的研究としては、がん幹細胞研究の進歩が期待される。